

うしお

第105号

昭和40年2月

目次

イセエビ蓄養試験	調査部	1
漁場観測速報(1月分)	養殖部	9
1月のマグロ延縄漁況	漁業部	12
定置観測(1月分)	養殖部	14
離島の人情	北山易美	15
奄美短信	大島分場	16
各部の動き	編集部	17
分場の動き	大島分場	18

鹿児島市城南町20番12号

鹿児島県水産試験場

イセエビ蓄養試験

調査部

本県においては沿岸漁業構造改善事業の一環として、イセエビ蓄養が各地で計画されている。

現在、かん水蓄養として瀬戸内海方面ではハマチのほかにもクルマエビ、トラフグ等がとりあげられているが、イセエビは本県のような外海に面する地域の特産物で蓄養の対象としても今後大いに注目されると思われる。

本場では前年度小規模の蓄養試験を実施し、歩留り100%で良好な成績を得たが、放養密度、投餌方法、増肉係数等に問題点が残された。

今年度は特に適正放養密度の究明を目的に試験を実施した。

§ 試験方法の概要

a、試験期間 昭和39年8月17日～12月10日(116日間)

b、試験場所 垂水市牛根熔岩 試験地

c、試験区分

1区 1㎡当り 10kg収容

2区 " 20kg収容

3区 " 30kg収容

但し、種苗の都合により1区は8.55kg収容した。

なお、各区の収容にあたっては選別を行わず大小を混じた。

d、供試魚

肝付郡佐多町伊座敷沿岸において8月中旬、佐多町漁協が特別採捕許可を得て漁獲したもので、平均320gのもの183尾を小型トラックにより試験地まで陸上輸送して供試した。

e、小型トラックによる陸上輸送の状況

1、所要時間 2時間30分

2、輸送距離 伊座敷～牛根試験地65Km

3、輸送量 78.8kg

4、方法

小型トラックに2,000ℓ容活魚槽を取り付けこれに約1,800ℓの海水を入れ、イセエビを収容してビニール製袋入り氷 $\frac{1}{4}$ 角を水槽中に浮かし、8本のエアーストンから毎分1ℓの酸素を通気して輸送した。途中氷の入れ換えを1回行なった。

5、水質の変化

輸送中の水質の変化は別図のとおりで、分析法は常法で行なった。

○PH 輸送前8.2のものが30分後に7.0にさがり、試験地まで6.9～7.0であつた。これは炭酸ガスの増加によつて炭酸を生じ、PHを低下させるものと思われる。

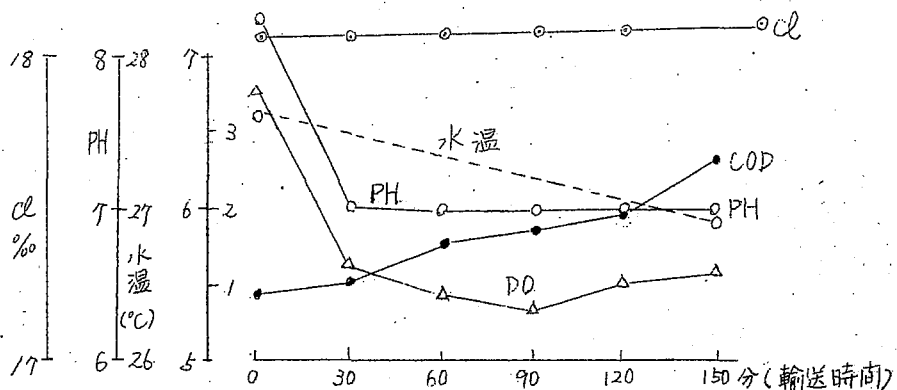
○酸素量 輸送前6.7ppmのものが輸送中を通じ5.3～5.9ppmであつた。

ハマチ及びタイ輸送試験では酸素通気量7~8 $\frac{1}{分}$ で8~10ppmであつたが、今回は輸送量が78.8kgと多かつたためか通気量11 $\frac{1}{分}$ でもなお酸素量が少なかつた。:

- 水温 輸送前と到着後に測定した。27.6℃及び26.8℃であつた。輸送中の水温は水の投入のためにこれより高温であつたとは考えられない。
- COD 時間の経過と共に高くなつている。
- Cl 変化なし。

6. 結果

輸送中の観察では、なんら異状は認められなかつた。試験地着後も活潑であつたが、トラックより海中に投入する際、酸素通気を停止したので後半のものがやや不活潑になつた。全部投入するまで酸素は通気すべきであろう。なお、騒死は4尾であつたが、これは採捕時あるいは蓄養中の原因によるものと思われた。



f. 投餌

1日1回夕方に投餌することとし、残り餌の状況を見て投餌量を適宜に変えた。

餌料はアジが大部分で、その他キビナゴ若干であつた。これらは鮮魚又は冷凍魚を解凍したもので、そのままあるいは細切して投与した。

g. 生簀

0.9 × 0.9 × 1.5 m 箱生簀 3個

側4面は金網(井16、1.5cm目)で、蓋と底部は板張りとし、蓋には鍵を取りつけて盗難を防止した。

§. 試験結果と考察

- 総体的にみて良好と思われるのは2区(20kg区)である。
- 成長について平均体重の変化をみると、次図のとおりで2区、3区、1区の順となつており、餌料転換効率では2区、1区、3区の順となつている。

試 験 区 分	1 区 (10kg区)	2 区 (20kg区)	3 区 (30kg区)
試験開始時尾数	27	62	94
減 尾 数	3	14	35
死 体 確 認 数	2	4	18
行 方 不 明 数	1	10	17
試験終了時尾数	24	48	59
試験開始時総重量 kg	8.550	20.050	30.000
試験終了時総重量 kg	8.750	18.500	21.850
試験開始時平均体重 g	316.7	323.4	319.1
試験終了時平均体重 g	364.6	385.4	370.3
総 投 餌 量 kg	27.734	61.750	93.840
平均日投餌率 %	2.51	2.43	2.53
平均日成長率 %	0.115	0.134	0.106
平均個体重の増重倍率	0.15	0.19	0.16
補 正 増 肉 係 数	22.67	18.11	23.96
餌 料 転 換 効 率 %	4.41	5.52	4.17
歩 留 率 (尾数) %	88.9	77.4	62.8
〃 (重量) %	102.3	92.3	72.8
脱 皮 確 認 数	27	68	84

○ 歩留りの最もよいのは1区で、次いで2区、3区と收容密度の高い程、歩留りは悪くなっている。

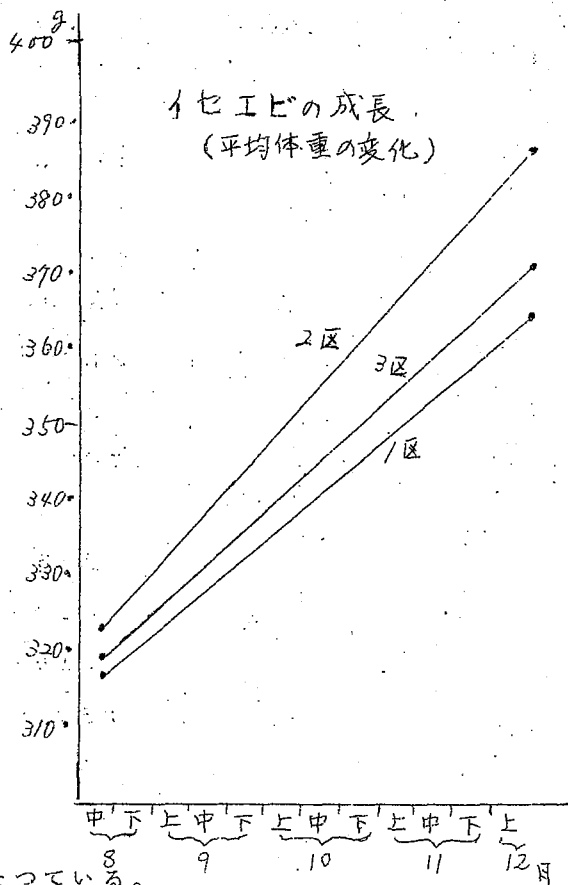
特に㎡当り30kg收容した3区では尾数で62.8%、重量で72.8%と著しく歩留りが悪い。

○ 養成の季節変化

日間の投餌率、成長率、餌料転換効率の旬変化は第1図のとおりである。投餌率は、全区共同様な経過をたどつて8月中旬の6.5%から次第に低下して11月以降は1%内外となつているが、そのうち8月下旬と9月下旬は台風のため一時的に低くなつている。

全期間通じてみると2.5%内外で、1区、3区、2区の順である。

成長率は2区が最もよく、1区、2区では9月上旬、10月上旬によく、3区では9月上旬、10月中旬が高くなつている。餌料転換効率は投餌率と逆の関係となつてあらわれ、何れも投餌率の低下する後半になるに従つて効率が高く



なっている。

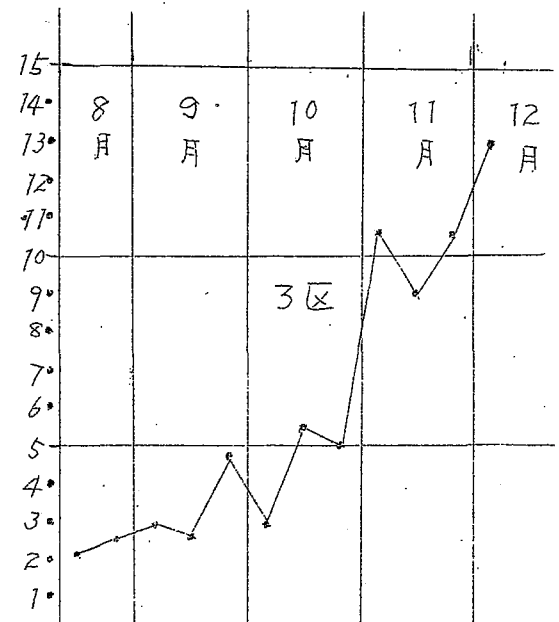
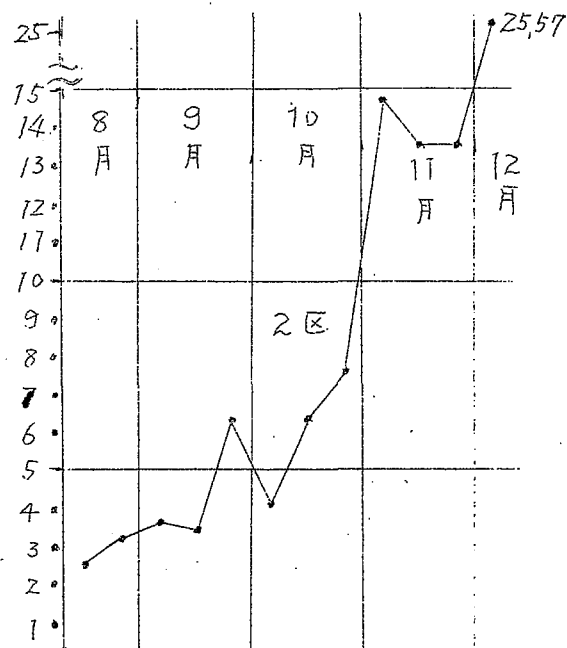
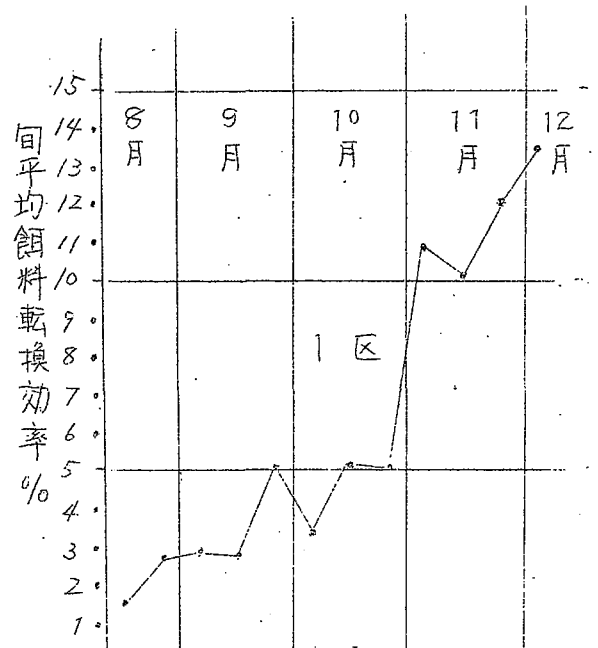
○ 脱皮の状況
各試験区共に9月中旬から10月上旬に多くの脱皮がみられ最も多いのは9月下旬である。(第2図)

前年度(38年度)のものは10月上旬から下旬の間で、10月10日前後に最も多くの脱皮がみられている。

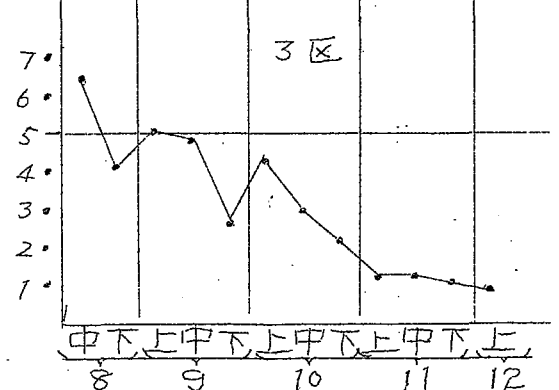
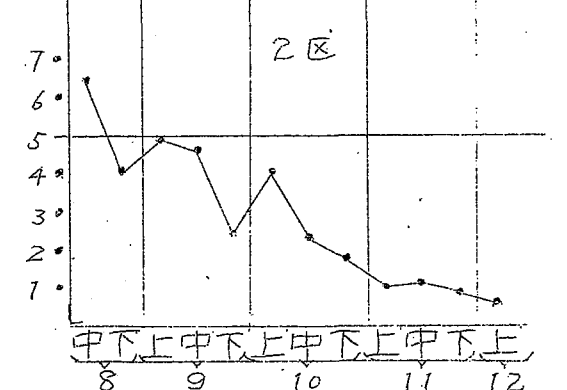
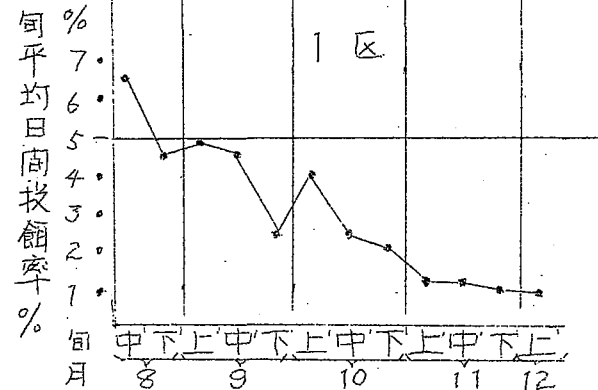
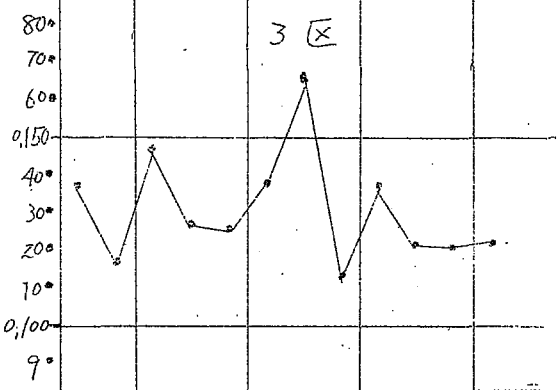
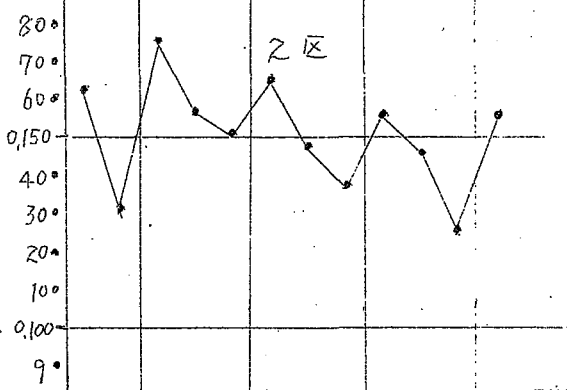
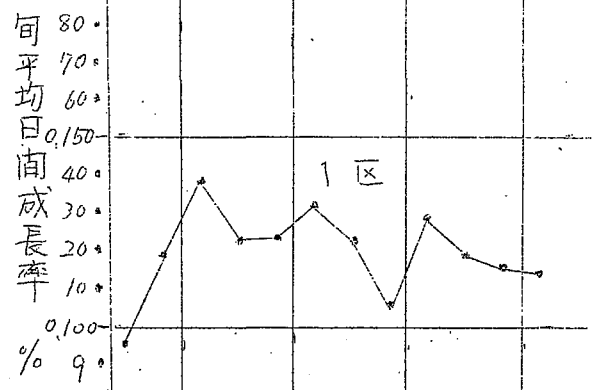
これら脱皮の状況を水温変化(第2図)と対比してみても、その間には相関の関係を見出せない。たゞ2ヶ年の蓄養試験の結果から言えることは、蓄養を始めてから30~50日の間に多くの脱皮がみられていることである。これは蓄養による投餌——摂餌と深い関係があるのではないかと思われる。

胸甲長階層別・月別の脱皮状況は次表のとおりである。

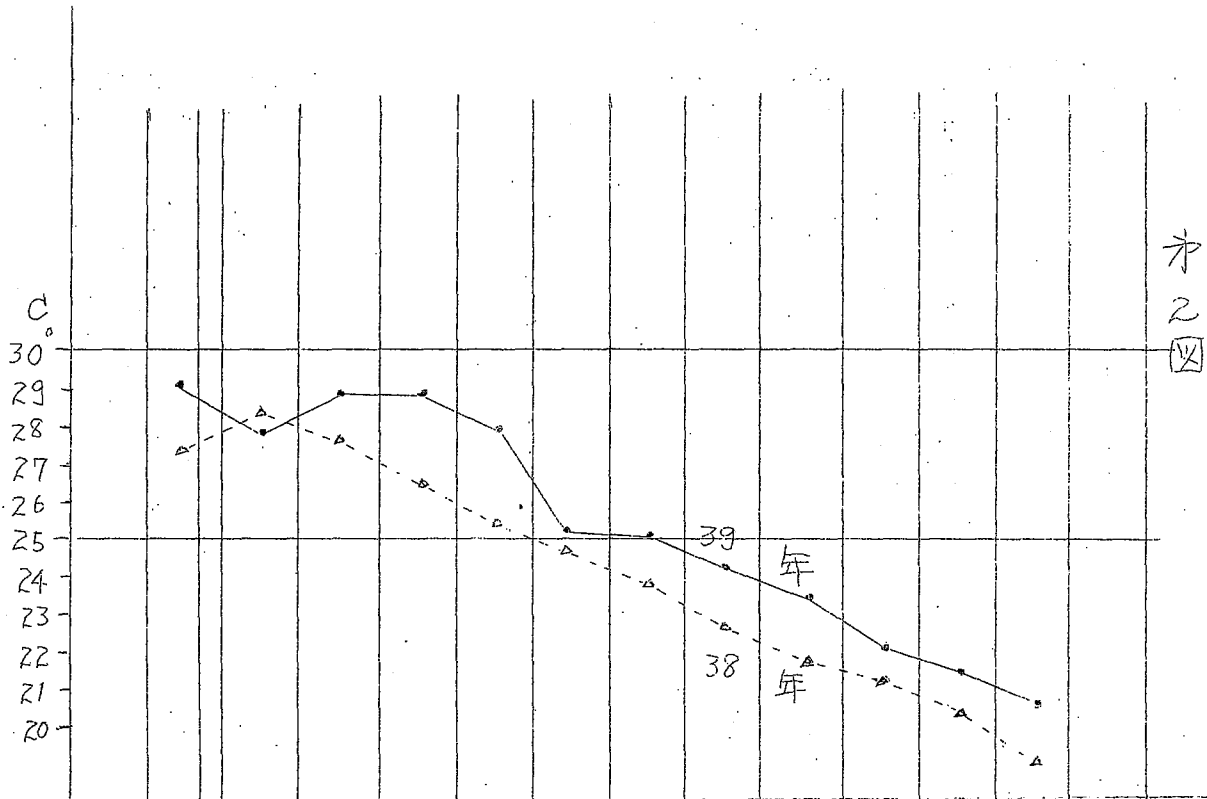
区	胸甲長 cm	8	9	10	11	12	計
7	4~	1					1
	5~		1				1
	6~		5	5			10
	7~	1	5	5	1		12
	8~						
	9~		1		1		2
	10~						
	11~						
	不明	1					1
	計		3	12	10	2	0
8	4~		2				2
	5~	1	8	2			11
	6~	2	11	7	1	1	22
	7~	2	14	3	1	1	21
	8~		7	2			9
	9~			1			1
	10~						
	11~		1				1
	不明			1			1
	計		5	43	16	2	2
9	4~		2				2
	5~	4	4	1			9
	6~	2	20	8			34
	7~	2	12	10			26
	8~		5	4			11
	9~			1			1
	10~						0
	11~						0
	不明	1					1
	計		9	43	24	0	0
総計	4~	1	4				5
	5~	5	13	3			21
	6~	4	36	20	1	1	66
	7~	5	31	18	1	1	59
	8~		12	6			20
	9~		1	2			4
	10~						0
	11~		1				1
	不明	2		1			3
	計		17	98	50	2	2



才
1
区

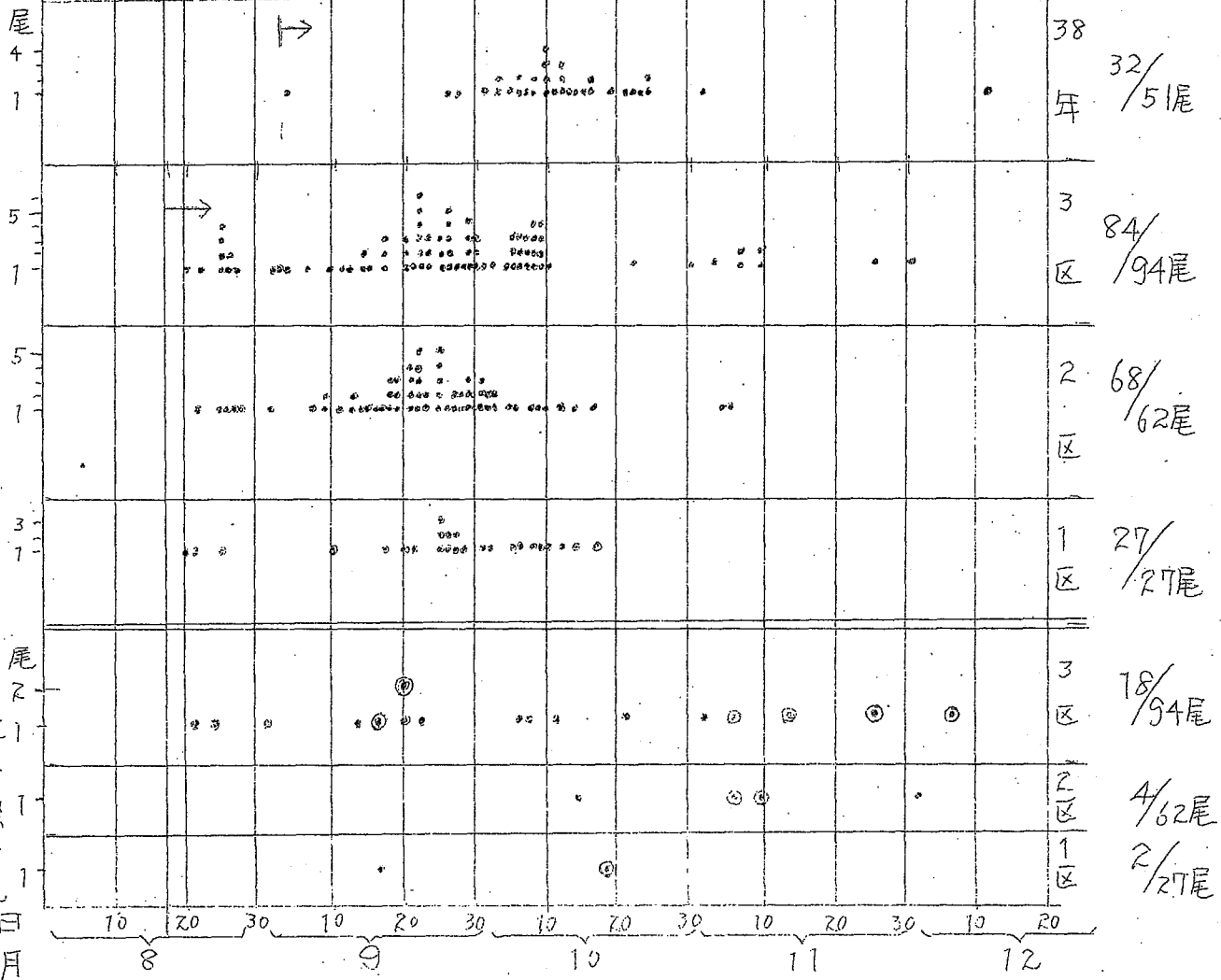


旬別水温変化

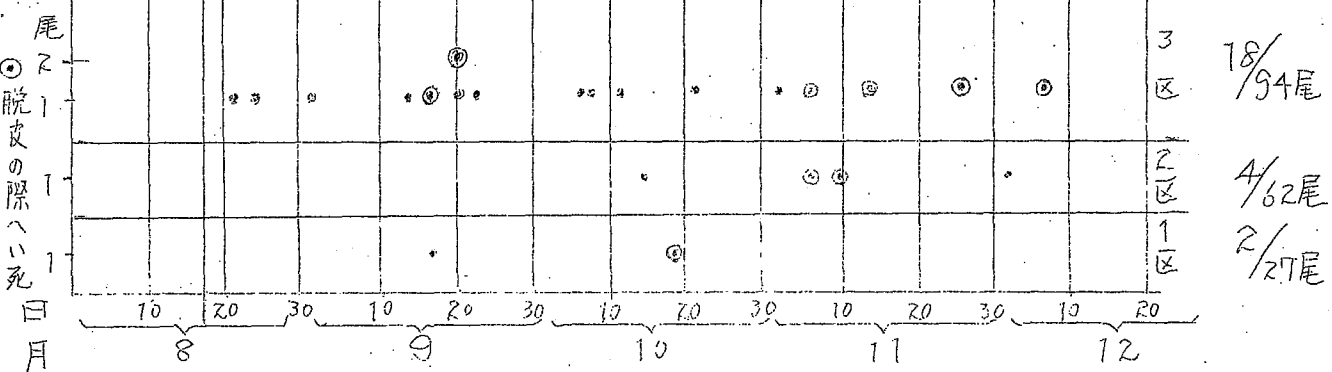


才2区

日別脱皮状況



日別(い死状況(確認))



○ 斃死状況

斃死を確認したのは第2図のとおりで1区で2尾11.1%、2区で4尾22.6%、3区で18尾37.2%と収容密度のたかい程斃死率もたかくなっている。時期的には、全期にわたつてみられ、特に集中している時期はないようである。斃死エビの大きさを胸甲長についてみると、最小が5.4cm、最大は7.7cmで、試験区別の平均胸甲長と斃死エビの胸甲長は次のとおりである。

	平均胸甲長(脱皮殻測定平均値)	斃死エビの平均胸甲長
1 区	7.0 cm	6.1 cm
2 区	6.7 cm	6.8 cm
3 区	6.8 cm	6.8 cm

すなわち1区では斃死エビが平均より小型のものであるが、2・3区では小型のものとは限つていない。

従来、イセエビ蓄養業者は、脱皮の際の斃死をかなり重視し無投餌蓄養というようなことをやっているので脱皮と斃死の関係について次に検討してみよう。脱皮中又は脱皮直後に斃死したものと確認されるエビは次のとおりであつた。

	斃死エビに対する割合
1 区	$\frac{1}{2}$ (50%)
2 区	$\frac{2}{4}$ (50%)
3 区	$\frac{7}{18}$ (39%)
総計	$\frac{10}{24}$ (41.5%)

斃死エビの約半数近くが脱皮の際に斃死したものと確認された。

これらのエビは友喰された形跡のものもあるが、脱皮の途中で斃死したようなエビでは、友喰の形跡は全くみられないものもある。

次に脱皮エビに対する割合をみると

1 区	$\frac{1}{27}$ (0.37%)
2 区	$\frac{2}{62}$ (0.32%)
3 区	$\frac{7}{84}$ (0.83%)

で脱皮エビのうち、脱皮の際に斃死したと確認されたものは1割足らずである。更に行方不明のものも脱皮の際に友喰されたものとみなし、前記の確認エビ(脱皮の際斃死)と併せて、脱皮エビに対する割合をみると

1 区	$\frac{2}{27}$ (0.74%)
2 区	$\frac{12}{52}$ (19.4%)
3 区	$\frac{25}{84}$ (29.5%)

で、1区で約 $\frac{1}{10}$ 、2区で $\frac{1}{5}$ 、3区で $\frac{1}{3}$ と収容密度のたかくなるに従つて、その割合がたかくなっている。

次に歩減りしたエビのうちで、脱皮の際に斃死したと確認又はみなされるエビの割合は次のとおりである。

1 区	$\frac{2}{3}$ (67%)
2 区	$\frac{12}{14}$ (86%)
3 区	$\frac{25}{35}$ (71.5%)

すなわち、歩減りエビの7～8割は脱皮の際の斃死、又は友喰いによるものと思われる。

このようにみえてくると脱皮時の斃死又は友喰いということはかなり重大な問題として考慮されねばならないようである。

投餌によつて脱皮がある程度早められ、又は多く行なわれて歩減りに影響することは一応は予想されるが、供試エビのような大きさのもの（平均3才エビ）では、1年に3～4回位の脱皮があると言われていたので、3～4ヶ月に1回は脱皮が行なわれている筈である。

無投餌蓄養でも蓄養期間が3～4ヶ月位にわたるとその間に若干の脱皮が行なわれるだろう。

更に神奈川水試の1958～59年の蓄養試験における隔日投餌、毎日投餌の比較では、一尾平均増重量において毎日投餌の方が約2倍近い値を示し、歩留りにおいても高率を示していることなどを考えれば3～4ヶ月間の蓄養においては、ある程度の投餌は必要であろう。

歩減りは、かなり収容密度と深い関係があるようであるので、ごく短期間でも収容密度を高くすることは歩留りを悪くし蓄養成績を低下させる恐れがある。一応、 m^2 当たり20kg位が適当であると思われる。

- 今回の試験では前記のとおり無選別の状態で実施し、脱皮の際に斃死したと確認されるエビの大きさは小型のものだけとは限っていないが、脱皮の際に友喰いされたとみなされる行方不明エビの大きさについてははつきりわからない。

大、中、小、3段階程度の選別を行なつて蓄養した方が歩減りを少なくするのではないかと思われる。

- 施設について

前年度試験の結果から生簀箱の底部が金網ではイセエビの飼育困難、餌料の脱落等があつて適当でないと思われたので、今年度は底を板張りとし黒色ビニール塗料を塗付していたが、3～4ヶ月の間にはフナクイムシ等によつて食害され穿孔されることもあつた。板には船底塗料類を塗付して、フナクイムシの食害を防止すると共に、板の内側に金網を取りつけるような手段を講じた方が良策であろう。

§ 摘 要

- 1、イセエビの適正放養密度の究明を目的に、1区（ m^2 当たり8.5kg収容）、2区（ m^2 当たり20kg収容）、3区（ m^2 当たり30kg収容）と区分して8月17日から12月10日まで蓄養試験を実施した。
- 2、試験成績を総体的にみて良好と思われるのは2区であつた。
- 3、歩留りは放養密度のたかい程悪くなつている。
特に3区では尾数で62.8%、重量で72.8%と著しく歩留りが悪い。
- 4、蓄養を始めてから30～50日の間に多くの脱皮がみられている。
- 5、脱皮と斃死の関係について検討してみると、放養密度の高い程脱皮の際の

死亡率が高くなり、そして歩減りエビの7~8割は脱皮の際の死亡又は、友喰いによるもの*ように思われる。

- 6、従来、業者間では投餌によつて脱皮がおこり、死亡が惹起されるので無投餌蓄養がよいと言われているが、3~4ヶ月間の蓄養においては、無投餌状態でも若干の脱皮が行なわれることが予想され、更に個体重の減少——歩減りも看過できないものがあると思われる。やはり、ある程度の投餌は必要であろう。
- 7、歩減りは放養密度とかなり深い関係があるので、ごく短期間の蓄養でも密度を高くすることは避けるべきであろう。一応、~~が~~当り20kg位が適当と思われる。

漁 場 観 測 速 報 (1月分)

養 殖 部

I 旬別平均水温

旬 測地 別	葛 輪		水 成 川		里	
	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
上 旬	15.49	14.46	17.7	17.1	18.65	17.65
中 旬	14.24	13.75	16.6	15.8	17.0	16.0
下 旬	13.91	13.56	16.59	15.77	16.75	15.86
月 平 均	14.52	13.91	16.95	16.20	17.44	16.48
前 月 差	-2.71	-2.82	-2.95	-3.25	-1.96	-2.13
前 年 差	-0.53	-0.50	-1.77	-1.73	-0.83	-0.37

○ 葛輪の月平均水温は14.52~13.91℃を示し、前月に比較して2.71~2.82℃低くなつてきている。これを前年同期に比較すると最高では17.62℃で0.53℃、最低では17.16℃で2.82℃と何れも低くなつて

いる。

○ 水成川の月平均水温は16.95~16.20℃を示し、前月に比較して2.95~3.25℃低く、前年同期に比較すると最高では18.72℃で1.77℃、最低では17.93℃で1.73℃と何れも低くなつて

- 里村の月平均水温は17.44～16.48℃を示し、前月に比較して1.96～2.13℃低く、前年同期に比較すると17.09℃で0.83℃、最低では16.4℃で0.37℃と何れも低くなっている。
- 長崎海洋気象台西日本海況旬報の1月下旬報によると、黄海及び東シナ海の水温は、季節風が衰え、冷え込みはいくらかゆるやかになり、全体的に平年より暖かい所が多いが、黒潮流域ではやゝ低目が続いている。又九州沿岸水温も季節風の吹出しで急に低くなりましようとのこと。

II 漁 況

1 葛 輪

総漁獲量1,920kgでこれを魚種別にみると雑魚が975kgで50.78%と大半を占め、次にタイが415kgで21.61%、ブリでは16.6%、ガラ10.9%となつている。又前月と比較すると830kgの減獲となつており魚種別にはイサキ漁が2,155kgなくなつた反面、雑魚で840kg、タイで295kgの増獲をみている。又これを前年同期と比較してみると282kgと僅かながら増獲をみており、魚種別ではカレイ漁がない代わりにガラで210kgの漁をみているのが目立つた程度である。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	
タイ	10	69	135	8	64	125	10	101	155	415
ブリ	10	69	230	4	32	90				320
雑 魚				10	72	455	11	105	520	975
ガ ラ							8	81	210	210
計	20	138	355	22	168	670	29	287	885	1,920

2 水 成 川

総漁獲量1,890kgで、魚種別にはシビが803kgで42.46%、次に多いものが瀬魚で全体の34.77%、次にイセエビが6.16%、ホコで4.8%、コダイで3.6%、アラで2.2%、コウイカで1.38%を占めている。これ等を前月と比較してみると総漁獲で614kgの減獲となつているが、変動の主なものはシビだけが261kgの増獲をみた。他の魚種、特に瀬魚では279kg、イセエビで148kg、イカ類で136kg……と減獲されている。更にこれを前年同期と比較してみると総漁獲で665kg少ないことになり、魚種別にはシビが513kg、タイ類で344kgの減獲となつているのが目立つている。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有日 漁数	延出漁 船数	漁獲量	有日 漁数	延出漁 船数	漁獲量	有日 漁数	延出漁 船数	漁獲量	
瀬 魚	10	22	453				6	18	173	626
シ ビ	8	35	685	4	14	118				803
ア ラ	1	1	40							40
チダイ	1	1	10							10
水イカ	1	2	12				3	5	19	31
イセエビ	2	5	96				1	5	15	111
コダイ							5	6	66	66
ホ コ							2	5	88	88
コウイカ							1	3	25	25
計	23	66	1,296	4	14	118	18	37	326	1,800

3. 里 村

総漁獲量 18,945 kg で前月より 9,840 kg と著しく減獲されている。

まず今月の漁獲について魚種別にみるとキビナゴが 10,500 kg で 55.4 % と大半を占め、次に瀬魚が 3,309 kg、イセエビで 3.9 %、ヒラスで 3.1 %、ヨコワで 2.6 % となっている。又前月と魚種別の変動を比較してみると、ヒラスで 6,480 kg、ヨコワで 8,055 kg、水イカで 980 kg、瀬魚で 2,870 kg

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有日 漁数	延出漁 船数	漁獲量	有日 漁数	延出漁 船数	漁獲量	有日 漁数	延出漁 船数	漁獲量	
ヒラス	6	5	390	4	4	80	10	10	135	605
イセエビ	5	65	520	2	26	210	1	15	15	745
瀬 魚	6	68	2,550	4	28	580	8	101	3,140	6,270
ヨコワ	2	7	495							495
ブ リ	1	1	50	1	1	25	3	3	95	170
キビナゴ				8	30	9,450	1	2	1,050	10,500
メジナ				1	1	55				55
水イカ							2	2	65	65
サ メ							1	15	40	40
計	20	147	4,005	20	90	10,400	25	148	4,540	18,945

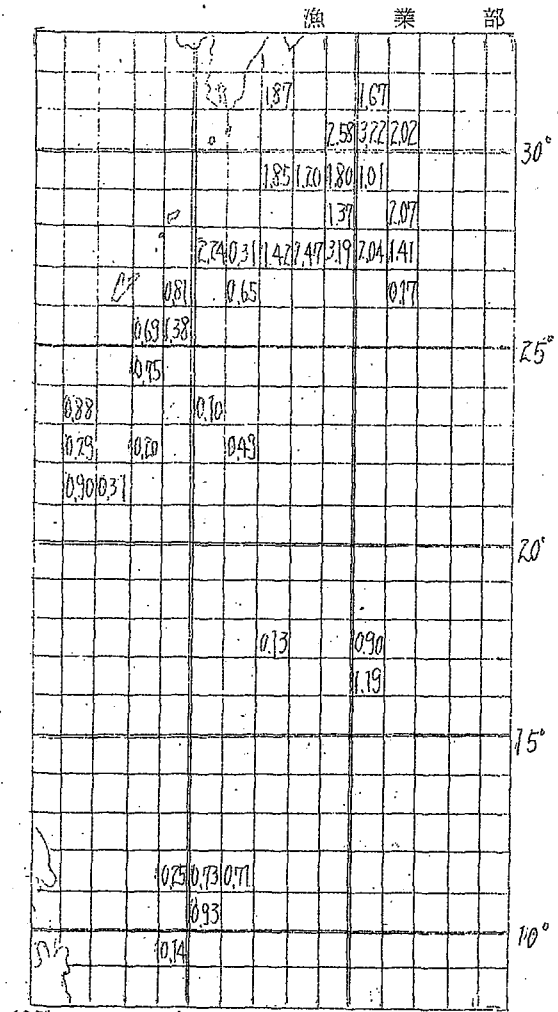
の減収、反面キビナゴ漁にめぐまれ 8,500 kg の増獲をみたのが目立っている。更に前年同期と比較してみるとこれ又 8,778 kg と減収となつている。変動の主なものについて魚種別にみてもキビナゴで 7,400 kg、ヒラスで 2,349 kg、ブリで 330 kg の減収、反面には瀬魚で 1,290 kg、イセエビで 145 kg の増獲をみたのが目立っている。

1月のマグロ延縄漁況

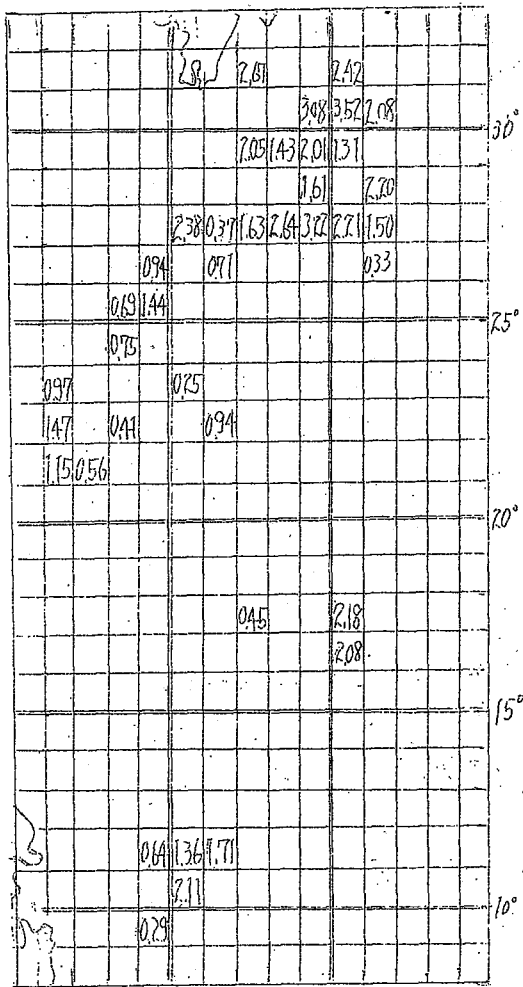
串木野船は大部分が清水方面を根拠として操業しており、鹿児島港入港船は例年に比べ少なく閑散である。

主漁場は喜界島東方の 2°N、130°E 附近から紀南沖であるが、今年漁況は芳しくないようである。昭和 38~40 年の 1 月の 2.0°N 以北に於けるビンナガの釣獲率を比較してみると第 2 図の如くで昭和 39 年が最も高く本年は 38 年よりやや低くなつている。又、一部台湾東方からフィリピン東方海域でキハダを目的として操業している船もあるがキハダも第 2 図の如くビンナガと同様の傾向を示している。

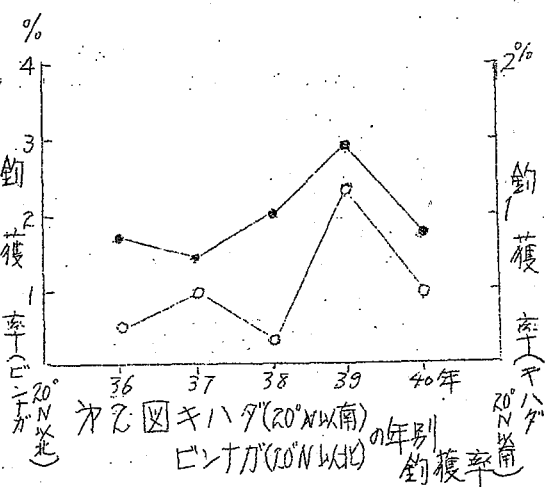
ビンナガの魚体は第 3 図のとおりである。測定尾数が少ないが、14 kg 前後 (FL 90 cm 前後) のものが主群となつている。



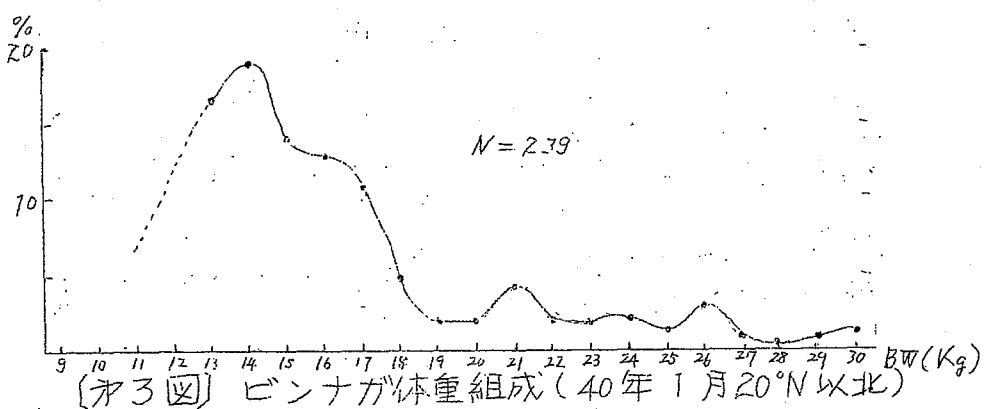
第 1 図 a. ビンナガの釣獲率 (40年1月)



カ1 図 6. マグロカジギ計釣獲率 (40年1月)



カ2 図 キハダ(20°N以南)の年別釣獲率
ビンナガ(20°N以北)



(カ3 図) ビンナガの体重組成 (40年1月 20°N以北)

定 置 観 測 (1月分)

養 殖 部

○ 旬別平均水温・比重(満潮時)

旬	水 温 °C				比 重 σ ₁₅			
	平均	前旬差	前年同期差	平年差	平均	前旬差	前年同期差	平年差
上	16.68	-1.30	+0.38	+0.09	26.78	-0.28	-0.23	+0.45
中	15.60	-1.08	-0.37	-0.23	27.10	+0.32	+0.30	+0.75
下	16.11	+0.51	+0.81	+0.57	26.94	-0.16	+0.08	+0.72
月平均	16.19	-2.29	+0.51	+0.30	26.92	-0.19	-0.11	+0.64

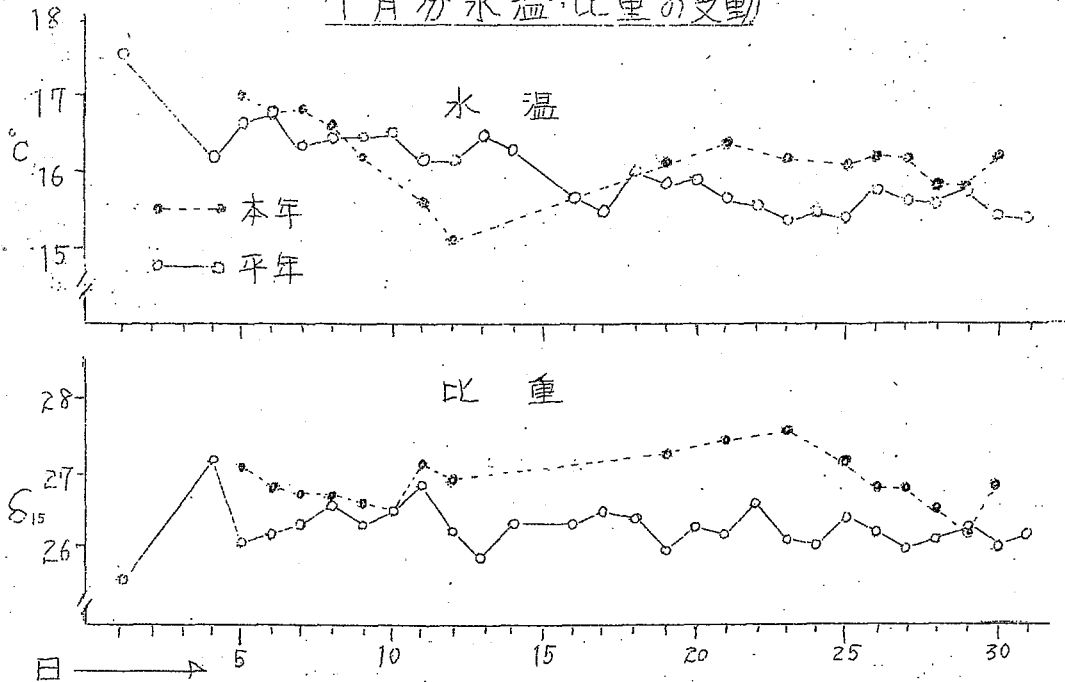
○ 水 温

15.1~17.0°Cの間で変動し、平年水温に比べ上旬は平年並、中旬はやや低目となつたが、下旬になつて0.5°C高目を示した。月平均水温は16.2°Cで前月平均より2.3°C降下したが、前年同期より0.5°C高目、平年値より0.3°C高目となつた。

○ 比 重

26.2~27.5と変動し、高かんな安定状態を採つている。月平均比重は26.9と前月より約0.2低目となつたが、平年値より0.3と相変わらず高目が続いている。

1月分水温・比重の変動



離島の人情

北山易美

戦後人情は極度に薄くなつた。殊に文化の進行と逆行するの故に都会では極めて薄く、文化に恵まれない土地ほど豊かに感じられる。中でも交通不便な離島になると淳朴そのものゝ人情に接する。

鹿児島県は本島の南に種子、屋久をはじめ奄美大島の本島までの間に大小の島が点々と並んでいる。所謂大島群島とかトカラ列島というのであるがそれらの島と本土との間は毎日便の種子、屋久を除いて殆んどが3日置き、5日目くらいに定期船が通つている。といつて港とか横付けするような岸壁があるわけではない。定期船は遙か沖合に投錨して島との間は部落の人が繰り出すポンポン船か手押しハシケで連絡するのである。

従つて海が荒れていると島の反対側の風除けのところからハシケを出したり双方とも波が高いと残念ながらハシケは出せない。何年目かに島に帰つて来た人や急ぎの用の人も故郷を島を眼の前にしながら逆戻りということが少なくないのである。

このように交通の不便な島で、しかもとりたてるような生産物も無いので島を訪れる人は稀である。(島内は殆んど同姓である) そのためか本土から行くとなつかしがられるというか、島の人たちの純情と言うか、定期船が来ると各家からと言つてよいほど殆んどの人が船付場に出迎える、そして道路で行交うたびに見ず知らずの人であつても軽くえしやくして通る。

また用務を了えて次の船便で帰るときは来たときと同じようにそれらの人が見送りに出る。船が汽笛を鳴らして動き出すと決つたように皆がアシタヨナーと呼びながらタオルやハンカチを振つて別れを惜んでくれる。

アシタヨナーというのはまた是非おいで下さいということであるが、大隅地方でも大正の末期頃まで子供たちが日暮れに友達と別れるときアシタヤとかマタヨナーと言つた、いずれも明日或いは再度あいましょう、遊びましょうで所謂次の機会を約束するのではないけれども別れぎわの挨拶ことばで島で聞くアシタヨナーと似ている。

こしき島は天草列島寄りの島で本土からは1日2便の定期船が通つて僅か2時間余で着く。島の人には本土をヂカタ、本土から来た人をヂカタの衆(シ)という。そして別れるときは必ずマタ来ヤイ申セ(またおいでなさい)といつて定期船が出て行く見えなくなるまでタオルやハンカチを振る。

これは別れを惜しむという見送りの礼儀のようであるがこのタオルなどを振るのをマネグ、他の人に命ずるときはマネグという。

アシタヨナーもマタ来ヤイ申セも言葉は簡単であるが本土では聞かれない島の人たちの人情があふれ出た言葉である。都会で聞くバイバイよりも私はこの見送りをうけるたびに島の人たちの純な人情が身にしみるように感じる。

(鹿児島県漁業公社専務取締役)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

此処奄美地方は旧正月に入り急に冷えこみ、本土から訪れた人々がオーバーがいらないとはうそじやらいとつぶやく。如何に南の島でも年に1.2度は火鉢を囲み餅でも焼く。一家団らんの日が来ぬと何か物足りないし、暑さばかりではボートとなつてしまふ。その寒さも朝で1.2で位だから大した事はない。

近頃電気コタツも殆んど各家庭に使われているが、大島では勿体ない気もするが結構よいものゝようコタツに入り、テレビを楽しむ裏に文化発展、科学の進歩に舌を巻く。母国復帰当時、施設のない文化果つる島と言われたのも今では復興事業費、振興計画等により益々本土水準に近づきつゝある、真に嬉しき事である。扱て、奄美短信なるものに殆んど書きつくされた現状では、仲々新鮮味のある短信が出来ないので、うわべだけの奄美でなく、昔の伝説も必要あるうかに思い、今女物語を取り上げて見た。

古仁屋から曲りくねつた道を歩いて約1時間、海岸線は南に向う嘉鉄部落がある。そのむかし、豪勢な生活をしている家に今女キユラムンがヤンチュウ(女中)として住みこんでいた。その今女は島に名を売るキユラムンで、何時しかその家の主人と逢瀬を楽しむようになった。愛し、いとしと言う恋心同様、何時も逢わねば淋しく寝つかれぬ今女にとつて、しのぶれど色に出にけり我が恋はものやと思ふと人の聞うまで、の歌のとおり遂に奥さんの知るところとなつた。それから言うものは毎日いじめられどうしで、今女の体は生傷が絶えなかつた。それでも人目忍んで逢瀬を続ける二人、或る日とうとう奥さんの怒が爆発し、真赤に焼いた火ばしで今女の局部に差しこんで殺してしまつたのである。

哀れな死に方をした娘の死体によりすがる今女の親達は、ヌガ、ヌガ、ガシガデナタル、キモチヤゲサヤ、アソ家ば一生呪いつぶしてやれと泣き叫び土葬にし唐竹日本を植えたのである。

やがて今女の一聞忌が近づき、唐竹が伸びた頃、火ノ玉が嘉鉄部落を飛び廻り、唐竹が風にゆさぶられと同様、奥様を始め三代に亘つて呪いつぶされ、豪勢な家も忽ちにして不幸におちいつたのである。

今でも時々火の玉は見られるし、古仁屋の或る商店から夜目にも美しいキユラムンが買物を済まし、ハイヤーで帰る途中目的地に辿りつかない中に消えてしまふ運転手は一晚中熱にうなされたのもごく最近の事で、新聞にも報道され、本場1部長からもその切抜きが事実かどうか返事してくれとの事で、夜中の2時頃便箋紙8枚程したゝめたものである。

近頃テレビの面白い番組としての、奇怪千萬、チュウズラリンを見るにつけ、今女やカンツメ物語等、むかし、むかしの奄美の伝説を想い出さずには居られない。又、東京の音楽舞踊団が砂糖キビ惨酷物語や犬田布騒動、カンツメ節等も歌劇化しつゝある。

ハブと黒糖と紬の島の歴史の一頁であろうか
とりとめない短信になりましたが、分場長以下皆元気で職務に精励しております。
本土の皆様の御健勝祈ります。

Y、S 生

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 養 殖 部

※ ノリ室内培養実験

- 2月1日～15日にノリ5品種について照射時間と生長の比較培養を行なった。
- 2月28日まで県下各地産イワノリ類について果胞子付けを行ない、糸状体培養を開始した。

※ 餌料生物培養実験

2月15日～19日鹿兒島湾内4点で採水した海水によつてSkeletonema sp. : Nannochloris : Chlamydomonas : の培養実験中である。

○ 製 造 部

※ BHTとDBT効果試験

前月に引続きフジを試料とし効果試験を実施、資料整理中。

※ カツオ廃棄物油脂測定

枕崎港における廃棄物利用のための魚粕製造施設計画の基礎資料とする為頭、骨、内臓の分離油、並びに荒粕等についての収容量を測定、分析値との相関性を比較した。

※ カタクチイワシ原料学的調査

煮干製造時の適正薬品使用量指導の資料とするため東市来町地曳網漁獲の旬別試料による油脂測定を実施した。今後県下主要水揚港について継続実施する計画である。

※ 養殖鯛粕漬製造試験

牛根養魚場飼育の上記製造、指導を行ない、観光土産品として市販されるに至つた。

○ 漁 業 部

- ※ 1月16日 照南丸帰港(湾海況海洋観測)、かもめ桜島観測
- ※ 1月22日～2月8日 かもめ一本釣漁業試験(こしき島近海)
- ※ 1月26日 照南丸 桜島調査
- ※ 2月3日～4日 照南丸上架(山川)
- ※ 2月5日～12日 照南丸漁海況海洋観測
- ※ 2月10日～12日 かもめ上架

○ 調 査 部

- ※ 1月28日 桜島真珠漁場水質調査
- ※ 1月29日 川内養鰻池水質調査
- ※ 2月4,5日 39年度海産魚蓄養試験報告並びに蓄養技術研修会を垂水市海潟にて行なう。
- ※ 2月20日 昭和38年度事業報告書製本完了、各関係機関へ発送。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 分 場 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 庶 務 係

- ※ 1月21日 支庁橋口会計課長補佐外1名来場 会計実地検査があつた。

○ 養 殖 係

- ※ 魚類の標本整理
- ※ マベ低水温の抵抗性試験

○ 製 造 係

- ※ 徳ノ島町金見において岩のり抄製指導
- ※ シラウニ液汁(流卵)利用試験

○ 漁 業 係

- ※ 北大島海区のキビナゴ調査

本年は1月中旬、竜郷湾番屋～久場間に小型群(BL3～4cm)、大型群(BL5～6cm)の2群が表われており、大型群は抄網などで漁獲され、一本釣の餌となつている。来游区域は小型群は岩壁及び波打ちぎわ等であるが大型群は岸から離れて来游している。名瀬市東岸の小湊沖合でも1月中旬来游群を見ているが、笠利、名瀬湾、大和村沿岸は未だ見当らない。本年は大島海峡は各沿岸域に来游が見られており、例年より1～2旬時期的に早いようである。